

椒酒從小者起ト云コト、後漢ノ世既ニコレ有ルヲ知ルベシ、其後晉ノ世ニ至リテ、或人董勛ニ、元日ニ屠蘇酒ヲ飲ムニ、從小者起ノワケヲ問シニ、董勛答ヘテ、小者得歲故賀之、老者失歲故罰之、ト云シヨシ、時鏡新書ニ載レリ、又唐ノ世ニ屠蘇ヲ飲ムニ、小者ヨリ飲ミ始メテ、段々年カサノ者ノ後ニ飲ムコトヲ名ヅケテ、婪尾ト云、又、咻尾トモ書ク、婪尾トハヲハリラムサポルト云義ニテ、老者ホド跡ニテユルリト酒ヲヨケイニ飲マシムベキノ意ニテ、老者ヘノ馳走ゴ、ロナルヨシ、莊季裕ガ雞肋ニモ、唐時稱婪尾者、以老者後得酒當有餘以優老也ト云ヘリ、董勛ガ説ト、莊季裕ガ説トハ表裏ノ違ニテ、何レモアマリ確實ノ説トハ思ハレズ、シカシ何レニモ、小者ヨリ飲ミ始ムルト云コト、フルキコト、見エタリ、

〔三養雜記一〕屠蘇少年より飲始 屠蘇にかぎりて年少のものより飲始むるよしは、○中吾邦の古も亦然り、内裏式に、元日就内侍取机盛屠蘇云々、尙藥供御先賜少年とあり、又屠蘇攷云、盧柳南小簡に、屠蘇卑幼より始むること不遜なり、元日は一歳の始め長幼の分を正し、長者より始むべしといへるは、理さもあるべきことに聞ゆれど、考の足らざるに似たり、其よしは屠蘇もと邪氣を辟る藥方にして、卑幼より始むるは、全く藥を用ゆる法を借たること、思はる、禮記に君の藥を飲には臣先嘗む、親の藥を飲には子先嘗むといへり、說苑に殷の湯王の言を載せて、藥食は卑に嘗て貴に至るといふ、これにて考ふるに、家内の人々ごとく屠蘇を飲むに、かりそめにも藥の名あれば、先こゝろむるものは誰をか先にし誰をか後にせん、故に卑幼をはじめとすること、至極のことわりなり、是全く聖人藥を用ゆる禮教をかり用ゆること、知るべしといへるは確論といふべし、

〔延喜式陰十六陽〕凡應供元日御藥童女年并衣色者舊年十二月上旬與御忌共奏之、

〔西宮記正月上〕供御藥事